

平成 17 年度研修生募集スタート

ハイライト:

- ・ 記念講演 「人生は夢」
波乱万丈の半生
- ・ 参加レポート 国際農業者フォーラムに参加した櫻井兄の報告
- ・ 奨励賞受賞! 園芸セラピー専門学校の作品が堂々受賞!

目次:

蒲島郁夫教授記念講演	2
畜産シンポジウム	4
国際農業者フォーラム	5
田中教育グループニュース	6
海外だより	7
スクラップブック	8
近況報告	10
帰国報告会案内	別

いよいよ今年も研修生募集の時期がやってきました。みなさんのまわりで「この青年なら」という若者がいたら是非農業研修に誘ってください。また職場やご近所でポスター、パンフレットの掲示をしていただけるような場所がありましたら事務局までご連絡下さい。研修生の募集期間は 8 月 30 日までです。会員の皆様のご協力をお願いいたします。

海外派遣 農業研修生 募集

21世紀は熱いぞ。

海の向うで農業体験してみませんか。
アメリカ（本土、ハワイ）
ヨーロッパ（デンマーク・ドイツ・スイス・オランダ）。
1年後、2年後たくましくなった君に逢うのが楽しみです。

You Can Do It!

■派遣人数および研修費

米国 2 年制:	100人
	40万円
米国 1 年制:	20人
	50万円
米国ハワイ:	12人
	61万円
米国実習主体:	10人
	28万円
デンマーク:	10人
	77万円
ドイツ:	7人
	76万円
スイス:	20人
	49万円
オランダ:	20人
	78万円

■その他の経費

- ・ 講習参加費
第一次講習 7 万円（米国）
7 万 9 千円（欧州）
- 第二次講習 3 万 3 千円
（米 2 のみ）
- 出発前講習 4 万 4 千円
- ・ 分担金 2 5 万円



永井 隆寛さん（愛知県）
ワシントン州（アメリカ）の野菜農家で研修



東 明音さん（静岡県）
オランダの切花農場で研修



濱崎 由梨江さん（福岡県）
デンマークの酪農家で研修



江島 正樹さん（佐賀県）
スイスの酪農家のクラス



「若い時の失敗は取り戻せる」
何も無くなってしまったり、あきら
めてはいけない。

東京都
蒲島 郁夫 米 2 2 回生

平成 16 年度壮行会記念講演

「人生は夢」 蒲島郁夫東大教授講演会



熱心に聴き入る参加者



当日参加してくれた
園芸セラピー専門学校の
生徒さんたちの感想です



「Above the Expectation」
ー 期待値を超えて ー

「人生とは1つ1つの舞台を乗り越えてこそ、自分の夢に向かっていける。」
講演を聞いて、改めて感じることができました。僕は高校卒業後、医療関係の
専門学校に進学し、卒業後は地元の老人病院に就職をしました。その時、自分
の「夢」はこれで終わりだと思いました。しかし4年程経った頃、このまま介
護の仕事が続けていていいのだろうか。と思うようになった。以前から造園の
仕事をやってみたいという気持ちがあり、思い切って仕事を辞めて、国際園芸
セラピー専門学校の入学を決意しました。今までのキャリアなどもありました
が、今は違う分野での勉強をしています。仕事を辞め、再度専門学校入学した
ことは蒲島教授が言われた、「人生の舞台」であったと思います。これからも
辛いことがたくさんあると思いますが、教授の言葉を信じて夢に向かって頑張
ろうと思います。◆グリーンフラワーガーデニング科◆ 1年 嶋 義成さん

蒲島先生は、熊本で農協に勤務した後に派米
研修生として渡米し、研修後もアメリカに戻
り、勉強を続けられました。結局は農業では
なく、子供の頃の夢でもあった政治の道に進
路変更されました。研修がきっかけとなり、
今日に至るわけですから思いがけないこと
が、人生のきっかけになるのだと思いま
した。私が蒲島先生の講演会に出席できたの
も、国際園芸セラピー専門学校に入学したこ
とがきっかけです。これからの人生におい
ても、先生が言われていたことを思い出し、そ
の時には先生のように小さなきっかけに気づ
き、自分のチャンス無駄にせず、生かしてい
けたらと思います。

◆園芸セラピー科 1年
遠山 祥美さん

蒲島教授の半生が綴られた「運命」





滝田兄「質問です」

「落ちこぼれ」から、農協に就職、農業研修生として渡米、そしてアメリカの大学に進学。きっかけが積み重なり、先生は勉強が1番やりたいということに気づいたそうです。私も何が一番やりたいのか、現在は模索中です。講演を聴いて、人との出会いがきっかけとなり、その人自身の力や道が開かれることを感じました。出会いの中で何かを掴み取る力、何かをやっていこうとする力を培うことが、最も必要なことだと思います。私も、いくつかの出会いや、きっかけをしっかりと掴んで一番やりたいことを早く見つけたいと思います。 ◆園芸セラピー科1年 箱田 絵美さん

先生は大草原で牛を飼うことが夢でしたが、現在は大学教授と最初の夢とは全く違うことをされています。私自身、一度は社会に出て働きましたが、本当にこれは自分がやりたいことなのかと疑問を持ち始めました。仕事を辞めたことをきっかけに人生をもう一度見つめ直そうと思い、現在は国際園芸セラピー専門学校で園芸療法の勉強をしています。人生何がきっかけになるかは分かりません。自分の進むべき道を選び、きっかけやチャンスを無駄にせず、夢に向かって人生を歩んでいきたいです。

◆園芸セラピー科1年 関根 幸子さん



壮行懇親会アルバム



「新しい分野へのチャレンジや品質管理への積極的な取り組みには感銘を受けました。」

県

安福 元章 H10/米1

平成 16 年度「畜産経営衛生向上国際シンポジウム」参加報告

食の安全に対するEUの取組



シンポジウム
写真提供：栃木県農政局

平成16年度畜産経営衛生向上国際シンポジウムが1月26日（水）に栃木県宇都宮市の「パルティとちぎ男女共同参画センター」で開催されました。開会前には、300席あまりあるホール内はほぼ満席になっていました。主催者挨拶・来賓挨拶の後、基調講演が行われました。

EU（欧州連合）での1990年代半ばからのBSEのEU諸国への拡大、口蹄病の発生、有害化学物質を含んだ家畜飼料等により、動物性食品の安全性と品質は社会に大きな不安を与えてしまいました。その信頼回復のため、EUの食品安全性の改善措置やドイツ国内独自の品質保証システム導入の取り組みについてラインハルト・パウ氏は講演されました。EUが提出した「食品安全に関する白書」について、またそれに

よるドイツ国内の影響、ドイツ国内独自の取り組みである品質管理牛乳（QM牛乳）についての説明がありました。

パウル＝ヨーゼフ・レップフェラー氏は、チーズの製造・販売へのチャレンジから、パウ氏の講演でも説明のあったQM牛乳の農家としての取り組みや、更にはHACCP（ハセップ）一危害分析と重要管理点方式一へのステップアップした品質安全保障への取り組みについての講演でした。レップフェラー氏は農業経営者としての講演で、興味深く聴く事が出来ました。新しい分野へのチャレンジや品質管理への積極的な取り組みには感銘を受けまし

フロアディスカッション

講演後、コーディネーターに萬田富治氏を迎え、講師2人とのフロアディスカッションが行われました。中でも、参加者からの質疑応答に時間がさかれ、多くの質問がありました。糞尿処理問題、品質管理による経費負担、生産乳価下落防止に取り組む組合活動の有無など。時間を予定よりもながく取りましたがそれでも足りないくらいでした。ドイツは乳価30¢/kgと言う非常に厳しい現状であり、レップフェラー氏の地域では農家が5年後には1/3に減少するだろうと予測しています。何とか生活はやっていけても、投資が出来ないため将来性が

無いと言われています。しかし、そんな状況の中でも厳しい品質管理を行うのは、消費者に対しての責任であり、品質を保証出来る食品を供給しなければならないと言う使命感のような心意気を感じました。また、農業を続けるには強い目的、目標がなければ厳しいと言う事を感じました。

そして、来年度の開催県である兵庫県へとバトンタッチされ、シンポジウムは大盛況の内に終了し、会場はレセプションへ移されました。



会場の様子
写真提供：栃木県農政局

◆基調講演演題

- ・ラインハルト・パウ氏（ドイツ（社）ラインラント地方州検査連盟事務局長）
演題：「ドイツにおける検査システムの功罪」
－ 生産者と消費者の信頼関係を築く －
- ・パウル＝ヨーゼフ・レップフェラー氏（ドイツ 酪農経営者）
演題：「我が家の家畜衛生管理」
－ 乳製品加工販売農家が実践する手法とは －

茨城県

櫻井 雄一 米2・36回生

平成16年度「国際農業者フォーラム」 参加報告

ご協力ありがとうございました

3月28日、今年は、名古屋で行なわれる国際フォーラムに参加させていただきました。当日は雨で、ちょっと残念でしたが、せっかく今年セントレアや、万博などで日本で一番熱い愛知県にきたので、名古屋の駅で、きしめんを食べてから地下鉄に乗り、会場である、名古屋栄 東急インに到着しました。

今回のフォーラムは、「世界に通用する日本農業へ」というテーマで開催された。そして、このフォーラムは農業経営の体質強化の方策、企業の農業経営者として具備すべき条件、国際化に対応した我が国農業の在り方等について農業

者レベルでの意見交換を行い、併せて相互理解と国際交流の促進を図るものとする。国際化の急速な進展に対応し、産業として自立し得るの日本農業の確立と、これを担う日本農業者の育成が強く求められている。このため、農業者の国際交流を活発化させ、企業の経営者の育成を目的に、海外経験の豊富な有職者を国内外から招待し、我が国の中核的農業者とともに国際農業フォーラムを開催した。



講演する本田元国農協常務理事



今回のフォーラムは、まず主催者のあいさつ、来賓祝辞で始まり、次に前社団法人農業者国際交流協会常務理事、米国カリフォルニア州在住の本田親盈氏の講演。愛知県農業総合試験場作物研究部、作物グループ主任研究員 濱田氏、愛知県国際農友会会員 松井氏による事例発表、意見交換会、レセプションと続いた。

まず初めの本田氏による講演では、『アメリカで考える日本の農業者への期待』という題で進んでいった。講演の内容は、①アメリカで今社会問題になっている肥満者の増加、それが引き金になり農業分野に変化が現れ、生産者と消費者達の理解度がお互いに高まり始めていること。そのことにより、生産の幅が広がり生産現場に励みが出始めていること。人より先に、人とは違った事で既成のシステムの中で見落とされている所、またはどこかにもぐりこめる隙間は無いだろうか、というダメモト的、意欲的な発想の転換の重要性。②日本農業のウィークポイントは、歴史、文化の違いにより培われてきた国民性。独特な日本農業や農村社会の中で、国際化時代を迎えた農業者として、今後どう展開していくかという、自分なりの判断と決断の重要性。独自性に欠け、競争力を持たないウィークポイントがある農業では、国際化時代を迎えた今日では生き残れないだろうという事への自覚。人に

先んじて改革することの重要性が理解できていれば、状況の変化に対応しやすくなり、変化した事を理由にして泣かずにすむこと。③農業者をビジネスマンと見た場合、これほど活躍している人はいるだろうか？農業経営者は、企業のすべてをこなす他産業には類を見ない優れた経営者達である。それだけに、能力的に欠けている部分があれば、経営に問題を生じ、健全な経営の継続が難しくなる事を十分理解しているはずの経営者達でなければならない。経営改善のための調査、研究には自分で取り組まない限り、人の後から落穂を拾うことになる。④アメリカにおける産地、地消の形の紹介として、急速に全国的な展開の伸びを見せている、いわゆるファーマーズ・マーケットの現状とCSA（地域住民支援型農業）の概要について紹介。自分達消費者サイドからも働きかけや支援をしない限り、安全な食料の確保は農業者だけでは現実不可能なのだという事に気づいた、消費者達の農業者支援活動の取り組み方について。最後に日本農業の未来を明るくものにできるのは、誰でもない、農業者の自覚と努力があれば現実できる事なのだ、と肯定的に前向きに考える姿勢の重要性。人間の生命をつかさどる食の大本を握っているのは自

分だ！という誇りと責任感に裏打ちされた農業者として生き方を大切にして、次世代に繋いでほしい。という内容を、アメリカでの事例やスライドを使いながらの講演となった。

続いて、濱田氏と松井氏による事例発表となった。初めに、濱田氏による『新しい水田農業を拓く不耕起V溝直播栽培』という内容でスライドを使いながら機械、作業内容システムなどの事例発表になった。ついで、松井氏による『大規模稲作経営について』の経営の現状、経営内容、取り組みなどの発表になった。

最後の意見交換では、所得を確保した魅力のある経営、技術の継承・更新、継続的に売れるものを消費者に提供する、地域とのかかわり合いなどが話し合われた。

今回の名古屋のフォーラムでは、いろいろな人と出会うことができ、有意義な意見交換などができたと思う。このような機会を与えていただいて、本当にありがとうございました。今回は、二日目に予定されていた、万博には仕事の関係で行くことができなかったのですが、機会を作って必ず行きたいと思います。ありがとうございました。

顧問 田中啓介

田中教育グループニュース

学園祭「立川菓子祭2005」開催

『KOKUSAI立川菓子祭2005』のテーマで、2月5日(土)・6日(日)に学園祭&卒業作品展を開催しました。今年は立川に校舎を移転しての初の開催ということもあり、職員・学生ともに総力を挙げて準備しました。

校舎では、卒業作品展、実演・体験コーナー、喫茶等を、立川高島屋では、クラス・グループ作品展と即売を行いました。両日も各コーナーに多数の方においでいただきました。また、立川高島屋さまのご協力をいただいた販売コーナーでは、たくさんのお客さんの列ができることもありました。来年もまた多数のお客様にご来場いただけるような学園祭&卒業作品展を開催したいと考えております。



パンで作った「落ち穂拾い」



卒業作品



販売コーナー

祝ガーデン部門奨励賞受賞！！

5月20日～25日まで所沢のインボイス西武ドームで開催された「第7回国際バラとガーデニングショー」のコンテストガーデン部門に初出品しました。藤森兄、宮崎兄のご協力もあり、たくさんの強敵の作品を抑えて見事奨励賞を受賞しました。作品タイトルは「ほっと！ステーション」、ハーブをふんだんに使用して園芸セラピー校らしい「癒しの空間」が演出できたと思います。



会場で見つけた草で編んだキリギリス



受賞作品



海外だより

ベトナムレポート

佐々木 忠弘 米2・14回生

◆「不動産バブルについて」

この3月末から再び、ベトナム：ホーチミン市の住民となりました。今回は、日本で生まれた次女（さくら）を含め、一家5人での滞在です。最近、NHKの海外紹介番組（衛星放送のみ？）で、ベトナムにおける不動産投機ブームに関する報道を視聴しました。まあ報道には、多少の誇張はありましたが、現在でも、その余波は、続いているようです。当市の中心部、東京でいえば、銀座4丁目当たりで、1平米100万円を越す物件など、一人当たり国民総生産が、5万円足らずの、当国でも、ごく一部の金持ち企業しか売買できない物件などの例もありますが、小金持ち（年収100万以上）や都市部のミドルクラス（年収20～30万）でも、資産運用は、不動産投機という例が多いようです。1年間の定期預金の利子が8%弱のなか、大部分の土地価格は、年間10～20%の値上がりを示し、開発計画が公表された土地は、30%以上の値上がりを示しているの、飛びつかないほうが不思議と言えるかもしれません。

実際、郊外を中心に、住宅地の開発が進み、都市計画行政が明確に機能していないこともあり、人口約700万の大都市が、膨張している感じがします。ちなみに、当地での不動産売買は、金（38gの延板）払いが基本です。自国通貨の信用度が低いからです。現在1枚当たり550ドルほどの、この延板（1テイルといいますが）が何枚というのが価格表示となります。

◆「ベトナム戦争終結30周年について」
今年は、ベトナム戦争が終結して30周年にあたり、当地では、その象徴とされる「サイゴン開放（陥落）」30年にあたる4月30日に、盛大な祝賀行事が開催されました。ベトナム戦争は、共産主義の北ベトナムに支援されたベトナム解放戦線（ベトコン）とアメリカに支援された南ベトナム政府軍の戦いという図式でしたが、終戦後は、共産主義によって、国土の統一を図る北ベトナムによるベトコン内の民主主義勢力の粛清などもあり、特に、敗者となっ

た旧南ベトナム軍・政府関係者やその家族、そしてベトコンの大部分を輩出した南部では、苦難の時を過ごした向きも少なくなっています。日本も一時、難民を受け入れたボートピープルの大半も、南部出身者で、その後、アメリカやオーストラリアなどに定住して、越僑と呼ばれ、その数、300万人とも言われています。当方の家内の親族の大半も、南ベトナム政府に関係していたため、戦後は辛酸をなめたようで、親戚には、戦後の親族呼び寄せや、ボートピープルとして、海外に逃亡・亡命した人も何人かいるようです。こうした越僑の帰国を促し、祖国の再建に寄与させようという政府の政策もあり、この10年で、数多くの海外在住ベトナム人が、帰国して、さまざまなビジネスを始めています。前記の不動産ブームも、こうした越僑による親族への仕送りや、祖国に不動産を所有したいという帰国した越僑に支えられている面もあるようです。

インドネシアレポート

大山 真由己 平成6年・ハワイ

こんにちは。インドネシア、バンドンから大山です。インドネシアでの生活も3年目に入りました。私は、来い当初、チブスで1週間入院しましたが、この4月は主人がデング熱に罹り、A型肝炎も併発して入院しました。入院期間は短かったのですが、回復にずいぶん時間が掛かりました。デング熱は毎年雨季の終わり頃に流行ります。デング熱を媒介するネッタイシマ蚊は、水溜りがあると1週間くらいで成長するので、蚊を完全になくするのは非常に難しく、ワクチンもまだありません。このネッタイシマ蚊の最適活動気温は25～35度ですので、日本でも誰かが熱帯地方からデング熱のウィルスを持ち帰れば、夏には流行してしまう可能性もあります。インドネシアの衛生状態は日本よりよくないので、日本では考えられないような病気に気を付けないといけないと改めて実感しました。健康はやはり一番大切です。

さて、2003年より、現地の高校生に奨学金を支給する、“ブンガサクラ奨学金バンドン”の活動を元JICA（国際協力事業団）のシルバークラティアの方と始めました。ブンガ(Bunga)はインドネシア語で「花」という意味で、ブンガサクラで、「さくらの花」という意味になります。す。インドネシアでは、日本のことを「さくらの

国」と言うこともあるくらい、さくらは有名ですし、さくらを見たいという人も多いです。

インドネシアは貧富の差が非常に大きく、学費が払えずに学校を途中で辞めたり、行かずに働く子供達も多いです。国等の奨学金もあるのですが十分ではありません。インドネシアの義務教育は日本と同じ中学までですが、ある程度の仕事に就くためには、高校を卒業していることが必要です。現在は17名の高校生に奨学金を支給しています。原則として1ヶ月の学費の金額を支給しています。日本円にして約500～800円の金額になります。学費以外に入学金や教科書代、交通費等の負担もありますので、貧困層にとっては決して安い金額ではありません。

高校生達は3ヶ月に一度奨学金を受取りに来るのですが、日本の一般の高校生と比べると素朴な感じがします。また1年に一度作文を書いてもらっているのですが、ほとんどの生徒が「両親を幸せにしたい」と書いています。私なんかより、よっぽど両親のことを考えているなあと感じさせられました。

国民の教育に対しては政府が責任を持つ



て取り組むべきだと私自身は考えていますが、今のところ政府はそこまで手が回っていない状態です。私達の活動が、少しでもこれからの時代を担う子供達に役立てばと思い、出来る限り続けて行きたいと思っています。興味を持たれた方、ホームページ (<http://www.mizuno.gr.jp/bunga/sakura.htm>) をご覧になって頂ければ、大変うれしいです。

スクラップブック

本間 惇 F I A 会長

コンパス 日本農業新聞 2005/05/20

◆「なぜ」の疑問を持とう

ラジオ番組「こども電話相談室」と本紙土曜日付「&you・ふしぎのたまご」は、子ども向けながら大人に人気があり、私もはっとする。

多くの物事に興味を持ち、「なぜ」の疑問を感じた子どもほど将来が楽しみであるといわれる。しかし、スーパーで季節を問わず、世界の物が何でも手の届くところにある時代に育った現在の子どもたちは、大切な「なぜ」を持たない。生産者の汗や自然の営みの大切さを知るどころか、工夫や我慢もできない、選挙や政治にも無関心な大人になっていく。生きた食育は、たくさんさんの現場を子どもたちに体験させることに始まる。いにしえの人々の生活の知恵は、現代のわれわれに多くを学ばせてくれる。

それを伝承し、自然と共生しながら大地に生きる農家の方々が、現場を知るプロの講師として実技教育を通して、「なぜ」の疑問を引き出してあげれば、農業の大切さを理解する輝きの目を持つ子どもたちが育つであろう。

一方、騒げ引きの多い大人の世界では、世の中が複雑になるほど大切な基本と本筋が忘れられて、話を難しくしている。金属疲労を起こしつつあるJA組織や時代に則さない見直しと改革の必要な法や慣習は、身の回りに数多くあり、その時期が到来している。

そこで大切なことは、民主主義の大原則に立ちながらも、少数意見にも耳を傾ける度量と、根底となる基本を踏み外さない程度の思い切った改革への挑戦と勇気だ。もちろん、合理化の裏腹にある安全・安心や弱者への気配りがなされことは当然である。

ここで私が最近持つ疑問を提示する。1つは、由緒ある町村名をかなぐり捨てて、日本地図を塗り替えるほど強引にまで進められている平成の大合併が民意を反映し、本当に住民のプラスになるのだろうか。2つ目は、食品安全委員会の全頭検査緩和容認の答申を受けたことで、7割の国民が緩和に反対しているにもかかわらず、問題の本質をはぐらかし、うやむやのうちに牛肉輸入再開を見切り発車させようとする政府の姿勢である。 私たちも、あなた任せではなく、「なぜ」の疑問と意見を持って、世の中を変革させよう。

ベストフーズ 社長 本間惇



提供：(社)国際農業者交流協会

村田 喜重 米2・現在米国研修中

北米報知 2005/05/07

僕の研修生活

「りりりりり…」と鳴る目覚まし時計をバンと叩き、寝ぼけまなこのまま食卓に向かい既に用意されているハム、ハッシュドパン、目玉焼き、残ったご飯をよそい、「いただきます」と誰に言うでもなく呟き食事をとり始める。僕らのドミトリーでは朝は当番制となっていて誰か一人が早起きをして朝食を作り、他のものは各々時間に間に合うように起きてきて食事をする事になっている。おかずの3種も僕がここに来た時から相も変わらず毎朝同じものが出てくるが、ここへ来て2カ月目くらいの時には毎朝の同じメニューにうんざりもしたけれど、今ではすっかり慣れて毎朝美味しく食べている。何より安い。これは僕ら研修生にとっても大事なことだ。僕の住んでいるサリナスは今の時期、全くと言っていいくらい雨が降らないし、これといって大きな建物も周りにはないので食事当番の時には窓から素晴らしい朝日が見える。そして仕事の始まる時間には昼間は暑くなることを予想させる高く大きな空が広がり始めている。僕の配属された研修先はサカタのタネのアメリカ支社でサリナスにあるこの農場は新品種開発のための研究施設だ。ここで働いているといろんな知識が入ってくる。僕は農家の出身ではないので純粋に新しい知識というのは嬉しい。先輩の話によると、かなりいんな知識を学んだとのこと。僕も可能な限り知識を入れていきたいなと考えている。僕らの仕事は種ブリーダー下でその補佐や苗や植物の水の管理、花の交配作業などで、力仕事というよりはもっと神経を使う仕事が多い。もし僕が失敗してブリーダーの意図とは違う種類の植物を交配させたりすると、今まで研究してきたこ

とがすべて無駄になってしまう。一つの新しい品種を作り出すのに5～10年は最低でもかかるそうで、これは仮に僕が完成間際の品種で失敗を起こすと僕が高校生の時から始まった研究、下手をすると中学生の時に始まった研究がすべてだめになってしまう計算だ。大変な時間と労力とお金である。それを考えるとぞっとしてしまう。これが僕の配属された農場だ。しかし普段の作業でびりびりやっているわけでもなく、いたって和やかに時間は過ぎてゆく。例えば今の時期の僕の主な作業はブロッコリーの交配作業でグリーンハウスの中で行われるのだが、ハウスの中はラジオからロックンロールが流れ、僕は上司ととりとめもない会話で笑いながら作業をする。ふとすると失敗が5年を駄目にするのを忘れてしまいそうになるくらい和やかな空気で満たされている。もちろん上司はアメリカ人で英語はまだ半分くらいしか聞き取れていないと思うし、ラジオは僕の聞き取りの邪魔をする。笑い合うのにも一生懸命だ。僕がこの作業をするようになって見つけたアメリカ人と日本人の違いの一つに音楽の趣味の違いがある。僕の上司は50代の女性なのだが、いまだにロックが好きであること、日本ならこの世代はきっとロックをほとんど聞かないだろう。欧米人はアジア人に比べ顔が歳をとって見えやすいが、中身はアジア人より歳をとりにくいような気がする。あるいはまったく違う歳のとり方をしているような気がする。僕はこのような文化の違いや農業のことなどを目の肌で感じ、経験し、日本に帰った時、友人にたくさん話を話せるよう頑張っていきたいと考えている。そのためには英語は話せるようになりたく、今僕は月曜から木曜日に仕事の後に英語の学校に通わせてもらっている。仕事の後のなの

OBの新聞記事を集めました

安田 弥生 F I A 副会長

ルンルン通信 ⑭ 農村報知新聞 2004/05/18

待ちに待ったゴールデンウィーク。我が畑のあるこの町は中央高速に近いので、ウキウキ観光地へ向かう車の列で大混雑。そんな車を横目に、こちとらせつせと軽トラで抜け道をスーイスイと軽快に走り抜けてゆくと、「キョエー」おまわりさへん。そう私は、あまりの暑さと畑と畑の移動だったため、シートベルトもしていなければ、免許証不携帯。トホホ・・・。

なぜ働いている私がかまの〜と自己中心的なグチを言っていると、横に乗っていた援農の黒著さんは「イヤア、おまわりさんは連休でも休めないのですね。暑いのにご苦労様です」と優しく話しかけていた。毎年連休中は、神奈川では夏野菜の植え付け時季。それが、今年は遅れに遅れている。農作業はタイミンクが何よりも大切と分かってはいるものの、全部の畑が借地で点在しているため、なかなか難しい。借りている畑のうちの一枚、一反四畝の畑を、四月一杯でお返しすることになり、慌ただしくこの日も畑の荷物を片づけて運んでいた時に、おまわりさんに御用となったのである。思えばこの畑に建っている小屋は、毎年四月に、アメリカへの海外研修に行く前に、事前研修としてうちにやって来る青年たちが建ててくれたものだ。壁には、「アメリカで農業馬鹿になってやる！」などと、皆、一言メッセージがたくさん書かれている。ところがその思い出の小屋を崩さなければいけない事態になるとは……。土だってやっとミミズが増えてきたところなのに……。 「小作人の辛いところよ」と、めげてもいられない。今年も五人の、アメリカ行きを控えた青年たちがやって来た。彼らに小屋を解体してもらいながら、来年はまた、この材で後輩となる研修生が何か違う物を建てているのかななどと考えていた。畑仕事もちろん、皆で何かを作り上げていくという作業は、仲間の意外な一面が見えたりもしてとても楽しい。今年で五年目の研修生受入れは、研修生と私の年齢にも差が開いてきたせいか、私もおばさんになったと感じたりもした。畑を返さなければならなくなったのは辛かったけど、人生、一つアクシデントがあれば、何かご褒美が待っているもの。この町でも、上流部にボツンと三枚の棚田が残っている。周りは驚くほどの美しい里山風景。竹林や小川、夏には蛍も飛び交う信じられない絶景なのである。その三枚を使ってくれないかという話が舞い込んできたのだ。援農の皆も、その景色にうっとり。私自身、日頃から援農に来て下さる方にとって、現在の畑では、周りが民家か工場で、景色がいまいちだなと思っていた。これで少し落ち着けるオアシスが見つかった。そしてもう一つ。現在、共同生活の寄宿舎は手狭になり、プライバシーのない生活を余儀なく皆に押しつけていた。そこへまたまた、知人が、大きい家と広い庭を貸して下さるという話もあれよあれよと決まり、これからは野菜を洗える場所や味噌部屋も確保でき、宿としても、心配がなくなった。

風の畑、六年目の春を迎え、一つ成長したな〜とうぬぼれる私に、両親は「まだまだよ!」と厳しくムチを振る。



好評連載中!!

農業報知新聞 ルンルン通信 from 風の畑

<http://www.nouson-houchi.com/column/runrun/>

絶景の棚田と

大きな家が・・・



風の畑 6年目の春は

苦あれば楽あり!



アメリカ研修前に
風の畑にやってきた青年たち

第 3 2 号



提供：(株)あいぶらす

会員近況報告

Viva Amigos

早川 真理 スイス

自給自足の生活に憧れていた学生時代。田舎生活の醍醐味は大自然や採りたての農作物、それ以上に「ひとと接しなくてもいい」というありえない幻想が大きなウエイトを占めていた。“人嫌い”になる瞬間はどんな人間にでもあるのだろうか。山岳部に所属し体力的にも自信のあった私は、自分だけでなんとかやっていかれるという傲慢な思いだったのかもしれない。

八ヶ岳中央農業実践大学校での1年間の寮生活は、そんな私の傲慢さを打ち砕いてくれた。年下の同僚や先輩たちはいつも強く優しく手を差し伸べてくれた。大学3年のとき、トレーニング中のスポーツ事故で著しく健康を損ねてしまっていた私は、炎天下での長時間農作業に耐えられるだけの体力がすでになかったからだ。仲間たちは「マリさん、また倒れたよ～」とか思いながらも、励ましフォローしてくれたのだった。

「仲間」ってなんだ。

私の中では“運命共同体”的な時間とともに過ごした友人たちだ。そのひとの優しさに触れたときに、ホンモノの仲間になれたような気がしている。

いまではがむしゃらになって笑ったり泣いたりすることもなくなって久しいが、最近、協会の“OB-mail”をきっかけにいくつかの出会い

いが与えられた。主に投稿されるのはすばらしいご活躍をされている大先輩ばかりだが、「海外研修」という共通点だけでたいへん親しみを覚えている。「仲間」とよばせていただくにはあまりにもおこがましいが、彼らの存在がとても大きなものになりつつある。インターネットというバーチャルな交流のなかで、メンバーのひとつとなりやこころに触れ、「会いたい!」という思いが募り、実際にお会いした方もいる。(ライターの端くれながら)筆不精で表に出ることが苦手な私も、ネットを使って気負いなくメッセージを届けられるようになった。あたたかい返信をしてくれる「仲間」たちのおかげだ。

「仲間」ってすてきだ。何年ぶりに会っても、すてきな笑顔が変わることがない。思い出だけでなく、未来について語り合うことができる。困ったときには手を差し伸べてくれるし、どんなことでも力になりたいと思う。そんな愛すべき友にひとりでも多く出会えることが今後の大きな目標でもある。

謝辞

難解なテーマを与えてくださったM編集長にこころから感謝申し上げます。



あいぶらすロゴ

株式会社あいぶらす（旅行会社）設立顛末記

www.aibras.com

内木 秀道 米2・5回生

23年間勤めた会社を退社することになった理由は、苦楽を共にしてきた同志との意見の食い違いが目立ち始め、このままでは自分が理想とした形に近づけないということだった。7月31日に退社届けを提出し、半年間の勤務を終えて1月31日無事円満退社することが出来た。40日間の有給休暇中に会社設立準備を整え、2005年2月2日（水）大安吉日の日を選んで新会社の登記を行った。

JR千葉駅から徒歩で3分程度のところにある30坪の事務所を契約し、前日には電話線工事と光ファイバーの工事を行った。

会社登記は司法書士の先生に頼み、10人分の机と椅子、接客用カウンター、会議室、更衣室、書庫、金庫などの家具の搬入と11台のパソコンの搬入と組み立てを同時に行った。午後から翌日にかけて電話機の設置とパソコンの無線LAN設定を懇意にしている業者に頼んで実施した。これでいつでも仕事が出来る体制は整った。

会計事務所も友人の紹介で千葉市内の税理士さんを紹介してもらい、会社設立の手順について親切な手ほどきを受けることが出来た。また、事務所の家具類やOA機器なども自分の顧客の中にそうした事業を営む方がいて安価に商品を提供して頂くことが出来た。

2月8日には会社登記の許可が下り、銀行口座を開設して預けていた1500万円の資本金を流用できるようになった。

2月10日諸官庁に開業届を提出し、千葉県庁に旅行業者としての登録申請を行った。

2月13日（日）この日も大安吉日だったの

で雇用を約束した社員3名に集まってもらい、総勢5名で経営方針と業務内容の説明会を行った。

「あいぶらす」は「ブラジルを愛する人々の為に!」という想いを社名にし、36万人にもなる「南米人社会のコミュニティーの為に、ネットワークを通じて貢献する」ことを社是とした。社章も三つの輪を組み合わせ、外円はガイア（かけがいのない地球）・南米大陸・中円と内円は日本の国旗を表し、楕円の輪は地球を飛び交うネットワーク通信網をイメージして自分で考えデザイン化した。

10ヶ条の社訓は日頃口にしていた言葉をまとめ、行動指針と経営方針、更には事業計画を発表して社員の意思統一を図った。

翌日からの仕事は全員でホームページの作成である。ターゲットはブラジル人社会を中心としているため、ポルトガル語版のサイトが必要であった。

次号へつづく

A map of the area around Maekawa Station. The station is marked with a blue circle and labeled '小田急線 参宮橋駅'. To the right is the '首都高速 4号線'. Below the station is the '代々木ランプ'. Further down is the '国立オリンピック記念 青少年総合センター'. At the bottom is the '正門' (Main Gate) and '南海出入口'. To the left of the station is the '案内板' (Information Board) and '案内所' (Information Center). The map also shows '代々木五丁目' and '代々木公園'.

印

本年度帰国研修生のみなさまへ
帰国報告会参加のお願い

お元気ですか？

帰国してからしばらく経ち、日常の暮らしにもやっと慣れてきたことと思います。さて、来る7月3日(日)、毎年OB・OGが楽しみにしている恒例の帰国報告会を開催します。アメリカ、ハワイ、ヨーロッパで、経験したこと、驚いたこと、学んだこと。何でもいいから聞かせてください。一人の持ち時間は20分くらい、質疑応答の時間もありますが、堅苦しく考えず「ありのままの体験」を伝えてくださいね。



帰国報告発表要項

形式：演壇にて発表
持ち時間：20分くらい
内容：自由

その他：写真、印刷物などがあれば持参してください。

概要を100～200字程度の文書にまとめてください。

問合せ先:03(5703)0254 担当:足達

東京国際農業者協会

東京都大田区蒲田5-39-2-6F
(社)国際農業者交流協会内

電話 03 (5703) 0254
Fax 03 (5703) 0255
Email adachi@jaec.org

帰国報告会日程

開催日：7月3日（日）

14:30 総会
15:30 帰国報告会
17:30 歓迎懇親会
19:00 閉会

- 当日どうしても参加できない方は、概要のみで結構ですので、文書にて提出してください。「東京FIAニュース」最新号に掲載いたします。
- 17時30分より歓迎懇親会があります。帰国報告者は参加費無料です。楽しい語らいにぜひ参加してください。